夏の終わり

蝉が遠慮勝ちに鳴いている
今年の夏は　どこで鳴けばいいのか
探しても見つからないような夏だった
たった　三日の寿命
気の毒なくらい控えめだ

秋の虫の方は　もうおらが大将といわんばかりに
鳴き出している

庭の隅で　ツクツクホーシの鳴いているのが聞こえた
これで、彼らも終われるのだろう

この夏も終わった

……天野美恵子

発表

先程から　息苦しい
完全に酸欠状態だ
どんどん　苦しさがましていく
肩で息をしている
頬も熱くなってきた
ドキン　ドキンが聞こえる
私のドキン　　ドキン

初恋に似ているかな

ぜんぜん
　ちがうけどな
見つけるものが……
そう思った時
「あった　あった」
受験番号
みつけたら
心の風船がしぼんだのか
ドキン　ドキンは止まっていた

闇王

君は知っているだろうか
心が　こんなにも　もろいことを
君はわかっているだろうか
心を変えることが
こんなにも　むつかしいことを
体が侵されていくということは
心も侵されていくことなのだ
強い意志をもって
その山を越えないと
闇王がしっとりした空気を広げて
手を伸ばしてくる
逃しはしないと言わんばかりに

今日も奴は来る筈だ
喉の渇きを止めに台所へ
闇王に見つからない為に
冷たいけれど　素足で降りていく
息を殺して忍び足で
そして
再び忍び足で登っていくのだ
捕まらなければ　朝まで至極の時
捕まれば　もろい心は彼らの馳走にされてしまう
彼らは「あっ」という間に闇に入り込んだ
そして
心という馳走をむさぼりつくす
応戦しようとするにもその強い力に手も足も出ず　負けを見る
コチコチと時計の音だけが部屋に響きわたる
今日もお前の勝ちだな　闇王
すこしずつ　カーテンの隙間から
陽が入ってくる　そうすると、闇王は帰っていく
今夜もまた来ると　半分眠っている私の耳元で囁き、去って行った
今夜こそ、眠ってやると遠くなる意識の中でささやきかえした